

ゼミナールの肖像 5: 板垣與一ゼミナール

板垣與一先生に師事して

岡本 毅

東京ガス相談役(昭 45 経)

1. はじめに

一橋大学を卒業して半世紀余り、思いもかけず恩師板垣與一先生のゼミナール時代を回顧する機会を得ることになった。

大月康弘教授から「一橋大学創立 150 年史準備室ニューズレター」への寄稿を依頼された時、一旦は辞退させて頂こうと思った。何しろ歴史ある板垣ゼミには、大先輩が綺羅星のごとく居並んでおられ、本来私などの出る幕ではない。一方で、縁があつて如水会理事長や母校の学外理事を務めさせて頂いたことを考えると、これもそのご縁の延長かと思い定め、お受けすることにした。

もとより、私自身が板垣ゼミの正史を執筆する資格も能力も有しているわけではない。本稿は、私の在学当時の板垣ゼミのありようを中心としつつ、大学生活全般、その頃の世相、卒業後の体験にも触れて、いわば一橋大学と板垣ゼミを核として見た時の私なりの通史とといったものになるであろうことをお許し願いたい。

2. 入学から小平時代

私は 1947 年に京都で生まれた。新聞記者であった父の転勤に伴い、小中学校時代を京都、津、大津で過ごした。中学の途中で東京に移り、高校は都立青山高校に入った。

高校 2 年生の時に父が早世したため、大学入試にあたっては「国立大でかつ浪人不可」が前提条件となった。そうした中で、在野精神に溢れた一橋大学に強い魅力を感じ、経済学部に進学することになった。出願日、特に急いだつもりはなかったが、自宅が大学に近かったこともあり、受験番号は 1 番となってしまった。

入試は 1966 年 3 月。全力を尽くしはしたものの、もちろん合否は定かでない。3 月 20 日の合格発表日、掲示板に「経済学部・1 番」の数字を見た時は本当に嬉しかった。

<大学生活の始まり>

1966 年 4 月 11 日、国立本校で入学式が行われた。学長は増田四郎教授で、入学者数は 753 名、うち女性 7 名であった。

前期（教養）課程が小平分校で始まった。当時の小平は、林と田畑が多く、まさしく武蔵



野のただ中であつた。単線の西武多摩湖線（国分寺～萩山）に「一橋大学駅」があり、駅から小平校舎正門まで田舎にしては幅広の道がまっすぐ通じていた。小屋掛けのような小さな駅舎ではあったが、大学の名前がそのまま駅名になっていることを何となく誇らしく思ったことを覚えている（但しその後数か月で隣接駅との統合により、同駅は廃止となった）。

第二外国語はドイツ語を選択し、独語 E クラスの一員となった。クラスの仲間は 42 名、北海道から九州まで全国各地から集まっており、まさに多士済々であつた。入学して最初に出会った仲間であるから、すぐに親しくなつたし、その後も長く付き合うことになる。「橋 E 会」と名付けたクラス会は、卒業から 50 年を超えた現在に至るも、年に 2 回の定例会を持ち続けている。

さて、いよいよ大学の授業を受けることになる。

高校出たてで問題意識は未熟であつたし、大変真面目という程でもなかったのも、しっかり集中して聴いていたとは言えないかも知れない。

それでも、例えば永原慶二教授の日本経済史講義は、実証的

当時の「一橋大学駅」



駅前通り



小平分校正門



かつ論理的で、「なるほど、学問とはこういうものか」と目を見開かされる思いをした記憶がある。他にも、鈴木秀勇教授のアダム・スミス「道德感情論」講義、南博教授の社会心理学、蓼沼謙一教授（後に学長）の民法等、印象深い授業はいくつもあった。民法では「善管注意義務」という言葉だけは覚えたが、それが実社会で極めて重要な概念であることを知ったのはずっと後のことである。

2年生での前期ゼミは、経営学の山城章教授にお世話になった。教授は学術会議会員にもなられた斯界の泰斗であったが、その時は、楽に単位をもらえるという噂を頼りに選んだゼミであった。今思えば、誠にもったいないことをしたものだ。

小平での2年間、学部横断的に様々な授業を受け、多くの関連書籍を読んだ。英語、ドイツ語にもかなりの時間を費やした。どれがどう身に付いたかは判然としないが、総体として、いわゆるリベラルアーツの一端に触れ、ものを考える上での土台の形成がいくらかは進んだように思われる。

<学業は措いて>

当時の生活ぶりについて触れておきたい。

国立大学の授業料は月千円、年間1万2千円であった。私は育英会の奨学金を月5千円支給されていた上に、家庭教師のアルバイトで月1万円から1万5千円くらい稼いでいたので、贅沢さえしなければ、それなりに学生生活を楽しむ余裕はあった。

クラブはワンダーフォーゲル部に入った。正直なところ、ハイキング部に近いのではと甘く見ていた。それがとんでもない間違いで、重いザックを背負って本格的な山登りをするものだと思ったのは入部してからである。それでも一生懸命付いていこうと努力はした。5月に丹沢の大山へ2泊3日の山行があり、これが初登山であった。この時、ザックのパッキングが悪かったせいもあるのだが、左肩を痛め、当分荷物が背負えないことになってしまった。これを潮に、やはり自分には無理だと退部。冴えないクラブ体験であった。

その後、硬式テニス同好会に入り、あまり真面目でない会員として卒業まで続けた。まさに名簿だけの会員で、友人と気が向いた時に好きなように打ち合うというテニスであったから、腕は全く上がらずじまい。ただ、縁というものはどこに潜んでいるか分からない。そんな私のことを会員の長門正貢氏（1972年・社 日本興業銀行*）が覚えていて、その縁で2016年、同氏が社長を務めていたゆうちょ銀行、次いで日本郵政の社外取締役にお声がけ頂き、結果として、日本郵政での氏の大変なご苦労にも身近で接することになったのである。

学業は措いておくとして、学生時代精力的にやったことを挙げれば、酒、麻雀、旅行の3つに尽きる。

* 以下、個人名に就職先を記す際には全て当時の社名とする



法律上は「お酒は 20 歳から」だったが、良くも悪くも当時は大らかな世の中で、大学生の飲酒を問題にする向きは殆どなかった。そんなわけで、入試合格直後に従兄からアルコールの「洗礼」を受け解禁してからは、若さの勢いにまかせて随分飲んだ。相手は、クラス・ゼミ仲間、クラブ・同好会仲間、そして出身高の先輩・後輩等々。安い 2 級酒や 500 円ウィスキー（サントリーレッド、ハイニッカ）をただただ呷るような飲み方だから、風情も何もあったものではない。しかし、酩酊するほどに談論風発、青臭い議論で喧嘩しながらも友情を育んでいくという姿は、まさに学生時代しか経験できないことであつたろう。

麻雀は入学直後から「同好の士」が集まって始めた。ささやかなレートであつたが、熱くなりながら卓を囲む日々が続いた。ゲームとしてこれほど面白いものはない。つつい誘惑に負けては、授業をさぼって雀荘（小平では「大陸」、国立では「ミドリ」「ドラゴン」など）に足を向けたり、同級生の下宿に上がり込んで徹夜をしたりといった具合。後から思えば、貴重な時間を随分浪費したものだと悔やむところもあるが、若い時には気付きようもない。

旅行にも熱心だった。アルバイトで稼いでは、仲間を誘って旅に出た。在学 4 年間に、北は北海道から南は返還前の沖縄まで足を伸ばした。学生の貧乏旅行だが元気だけはあるから、大いに見聞を広め数々の面白い体験をした。当時は今よりも学生に対し世の中が優しい面があり、旅の先々で随分甘えさせてもらった。ざっと数えてみたら、4 年間に旅に出ていた日数が合計 180 日位あつた。クラス仲間では、今井一雄（日本輸出入銀行）、高橋憲博（住友銀行）、濱浦清（三菱商事）、丸橋英夫（東レ）、三谷清（三菱商事）、吉岡利泰（東京海上火災保険）等諸氏との様々な旅が記憶に残っている。

3. 後期国立へ——板垣ゼミ

2 年生も終わりに近づき、いよいよゼミナールを決める時期を迎える。

当時は経済学を大きく「近代経済学（近経）」「マルクス主義経済学（マル経）」に 2 分する見方が主流であつた。マル経を選ぶ気持ちはさらさらなかったが、近経主流の、数式を駆使しながらマクロ、ミクロの経済を論ずることにも惹かれない。そうした中で、板垣興一教授が講義される「世界経済論」のシラバスを見て、「自分がやりたいのはこういう分野ではないか」と思い始めた。先生の議論は、主として発展途上国の現状を、政治学・経済学・社会学を包含する広い視点から大きく捉え、分析し、将来展望を示すというものであらうと自分なりに理解した。そして、是非ともこのゼミに入れて頂こうと心に決めたのである。

板垣ゼミへの志願者は 20 名以上いたと記憶する。小レポート選考により、その中の 15 人（加えて留学生 1 名）が参加を認められた。一橋大学の最大の特長であるゼミナールを自分の希望する分野、希望する教授の下で受けられることが決まり、大いに安堵した。



＜板垣與一先生のプロフィール＞

板垣與一先生は、1908 年富山県新湊町にて生誕された。小樽高等商業学校を経て東京商科大学に入学した。ゼミは中山伊知郎教授に師事し、1932 年に卒業。1935 年母校の助手、1940 年助教授につく（植民地政策、商業政策担当）。

1942 年に南方軍軍政総監部調査部付となり、シンガポールに赴任。インドネシアの農村調査を行う。1944 年馬來軍政監部調査部員となり、マレー民族運動に関与。同地で終戦を迎え、1 年後に帰国した。

1949 年東京商科大学教授、1951 年一橋大学経済学部教授（経済政策、世界経済論）に就任。その後、大学経済学部長



兼大学院経済学研究科長、附属図書館長、評議員などを歴任、1972 年に定年退官し、名誉教授。

一橋大学退官後は、亜細亜大学教授（後に経済学部長、経済社会研究所長等を歴任）、八千代国際大学（現秀明大学）初代学長を務め、1993 年退職。

この間、アジア経済研究所を始め、日本経済政策学会、日本国際問題研究所、日本学術会議、貿易研修センター、中東経済研究所等、多くの研究機関・学会の創立に関り、また運営の中核を担ってきた。

1980 年勲二等瑞宝賞受賞。2003 年逝去。享年 94 歳。

板垣ゼミの第 1 期は戦前に遡り、以来戦中の中断を除いて継続されてきた。私は 1968 年 4 月に先生のゼミの門を叩き、第 27 回のゼミ生となった。ちなみに、板垣ゼミはその後 28 回生、29 回生を送り出し終了となった。つまり、私たちは、長いゼミの歴史の中の最終章というべき時期に在籍したわけである。日本の経済政策学の中核的存在であった先生は、アジアを中心とする発展途上国論の正に第一人者であった。そうした国を代表する碩学から直接薫陶を受けることになった私たちは、誠に幸運であったと言わねばならない。

＜ゼミでの研究テーマ＞

3 年生となり、後期（専門）課程が始まった。校舎は小平から国立へ変わる。三角屋根の国立駅から大学通りをまっすぐ歩き東西の校舎に至るたたずまいは、今と大きくは変わらない。キャンパスの美しさは当時から他のどの大学に比しても際立っていた。

板垣ゼミは毎週木曜の午後が定例日であった。まずは、先生から入門のレクチャー。著書「アジアの民族主義と経済発展—東南アジア近代化の起点」（1962、日経・経済図書文化賞受賞）は必読の書であった。先生が博士論文として満を持して著された本書は、この分野の研究のバイブルとも言えるべき重厚なもの。その後、問題点にぶつかるごとに、何度この書に立ち返ったか分からない（私は、卒業後幾度も転居しその都度書籍も整理してきたが、この本だけは今も書棚の一角にしっかりと収まっている）。

それ以外に薦められたものとしては、ビルマ（現ミャンマー）の経済学者フラ・ミントの



「低開発国の経済学」（1964、邦訳 1965）や、ノーベル経済学賞を受賞したスウェーデンの経済学者グンナー・ミュールダールの「経済理論と低開発地域」（1957、邦訳 1959）などが記憶に残っている。

また、先生が戦後間もない時期に著された「政治経済学の方法」（1951）をひも解いて、社会科学における方法論の問題に初めて触れることになった。本書の議論を通じて、マックス・ウェーバーが論じたいわゆる「価値自由」（Wertfreiheit）が、社会科学を研究する上で根本的な問題を提起していることを知った。政策論において価値判断との関係を常に整理しておく必要があるという視点は、卒業後の社会生活においても重要性を持ち続けた。

ゼミに入って間もない時期に、先生から、個人毎の研究テーマを絞り込むようにとの話があった。大した勉強もしないうちにそんなことを言われても、というのが実感であったが、とにかく何か考えねばならない。

当時の世界は、米ソ両陣営間の東西対立と、先進国と発展途上国の間の南北対立が国際関係の軸をなしていた。そして東南アジアはその両軸が交差する十字路であるという見方ができた。そんなことを頭において私は、「東西対立と南北対立の交点である東南アジアにおいて、その交点であるがゆえに諸国の政治的自立と経済発展がどのように規制されるのか、といった問題意識で勉強をしてみたい」という趣旨のことを述べた。顧みて恥ずかしくなるが、誠に観念的、抽象的で、そもそも何を切り口に入っていくのか、全く具体性のない稚拙な議論であった。

私の話を聞いた先生は、「そうした問題の基本に、各国の民族主義の動向がある。まずは、地に足の着いた研究をしてみては」と未熟さをやんわりたしなめられた上で、1冊の分厚い洋書を手渡された。

Nash, Manning “*The Golden Road to Modernity: Village Life in Contemporary Burma*” (New York: John Wiley & Sons inc., 1965, viii+333p.)

著者のナッシュ（1924-2001）はシカゴ大学教授（人類学、民族学）で、東南アジアやラテンアメリカ諸国の村落レベルでのフィールドワークをベースにして、政治・経済・社会の研究を行っていた。上記の書も、ビルマの2つの村落に長期に亘って滞在し、その政治・経済・社会構造を解析し、近代化の可能性と障害を探ったものである。

さらに先生から後日、本書を補完するもう1冊の著作を示された。

Pye, Lucian “*Politics, Personality and Nation Building: Burma's Search for Identity*” (New Haven: Yale University Press, 1962, xx+307p.)

著者のパイ（1921-2008）はMITの政治学者で、中国を中心にアジア諸国の政治形態を実証的に研究していた。本書はビルマの政治構造を村落レベルまで下りて研究したものである。

かくして私は、大著を2冊抱え込み、まさに「地に足の着いた研究」とは何かを知るために悪戦苦闘することになった。



なお、板垣ゼミにおける研究テーマ選定の自由度は高かった。他のゼミテンの卒論テーマを見ると、発展途上国論のみならず、

- ・経済学者ジョン・K・ガルブレイスの新産業国家論を批判的に取り上げる。
- ・政治学者ハンス・J・モーゲンソーのパワーポリティクスを論ずる。

など、非常に多彩で、私などは、みんな凄い勉強をしているなあと感心しきりであった。これも、板垣先生の学問領域が極めて広いことの反映だったと思われる。

＜楽しかったゼミ生活＞

勉強そのものはもちろん楽にはいかないが、板垣先生やゼミの仲間との交流は楽しかった。

先生は本当に優しい方で、いつも穏やかな笑みを絶やさず、息子というよりは孫に近い年齢のゼミテンを可愛がって下さった。

毎度のゼミ終了後一同は、しばしば先生と喫茶店に移動しコーヒーをご馳走になった。「白十字」「ロージナ」「邪宗門」といった店の名前が記憶にある。先生は話好きで、自らの現地体験も含め古今東西に亘る話題は尽きることがなかった。私は帰り道が同じであったので、中央線の電車の中まで話が続くこともあった。

また、ゼミテン一同、奥様の迷惑も顧みずしばしば江古田のご自宅にお邪魔した。時には全員揃ってゼミコンパのようになり、みんなで餃子作りを手伝いながら騒ぐこともあった。学問も含め、「来る者は拒まず、去る者は追わず」が先生の信条であったと思う。それともう一つ、繰り返し言われたのは「本読まざれば進歩なし」。今も忘れない。

ゼミ仲間は優秀な人ばかりだったが、勉強の仕方はそれぞれ。私などは、お酒や麻雀を通じての付き合いが多かった。また、夏のゼミ合宿（妙義山）や冬のゼミ旅行（河津）は当時の4年生も一緒に、勉強よりは遊びが実に愉快であった。同級生とは2年間同じ釜の飯を食いながら付き合いを深めていった。名を記せば、岩井悠紀夫（日本電信電話公社）、大淵広明（東京銀行）、小澤清一（三井物産）、小原與一郎（ダイナガ）、駒谷進（麒麟ビール）、佐藤謙二（東京銀行）、富田和文（住友商事）、中尾新之（第一勧業銀行）、中嶋猪久夫（東海銀行）、中村瑞夫（住友商事）、松岡宏幸（日本板硝子）、丸橋英夫（東レ）、柳平三雄（東芝）、山県和彦（第一勧業銀行）の諸氏。多くのメンバーは今に至るも、大淵広明氏のお世話で定例ゴルフ会を開いている。



板垣ゼミ集合写真（卒業アルバムより）



すぐ上の年次である 4 年生とも随分お付き合いをした。卒業後も含めて親しくさせて頂いた方々として、浅海芳久（三和銀行）、小野正昭（外務省）、加藤貫太郎（三井物産）、岸清一（日本碍子）、重家俊範（外務省）、田中健二（日本輸出入銀行）、辻本甫（外務省）、森克彦（三菱商事）、山本和男（住友信託銀行）といったお名前が浮かぶ。

中でも、山本和男、佐藤謙二、中村瑞夫の 3 氏とは、在学中からしばしば酒、麻雀や旅を共にし、卒業後も長く親しい付き合いを続けてきた。今でも顔を合わせれば即座に 50 年前へタイムスリップ、書生っぽい議論に興味の尽きることがない。

同級生にはもう一人、ラオスからの留学生ウドム・ラタナヴォンさんがいた。ウドムさんは 1943 年にラオスの地方都市サヴァンナケートで生まれた。ラオスのリセ（Lycée、フランス高等学校）を卒業し、1965 年に日本国政府留学生として東京外大に入学した。そこで日本語等を学び、1968 年に一橋大学経済学部で学士入学、板垣ゼミの一員になった。何しろ我々の研究対象である東南アジアからの留学生であるから、ゼミテンの注目の的。いつも穏やかな笑顔で、現地の政治経済社会情勢など様々な話を聞かせてくれた。

ウドムさんは我々と同じ 1970 年 3 月に学部を卒業。大阪万博ラオス館副館長などを務めた後、日本人の伴侶を得て帰国、ラオス経済計画省に就職した。しかし、政情不安定な中で仕事は思うにまかせなかったようで、1974 年に再び一橋大学に留学、大学院修士課程に入



った。1976 年には、母国の政変もあってついに日本への亡命を決意。修士課程終了後、麗澤大学に職を得て、フランス語と東南アジア文化等を教えるかたわら、ラオスを始め東南アジア諸国の難民支援などに尽力してきた。1983 年に日本へ帰化、日本名竹原茂。

氏はその後も一貫して、母国や周辺諸国で苦労を強いられている人々への支援活動に携わっている。今も、ラオスへの中国の「経済侵略」に対する悲憤慷慨の手紙をもらったりする。

在学中の接点はなかったが、ゼミの 2 年上（1968 卒）の先輩お二人の名前も記しておきたい。

鈴木典比古さんは、米国での学究生活を経て ICU に移り、学長まで務めた。その後、乞われて秋田県の国際教養大学学長に就任し、同校の発展に尽力されている。2017 年 5 月に如水会主催の一橋大学移動講座で秋田を訪れた際には、鈴木さんと親しく対面し、国際教養大学の独自色溢れる運営についてお話を伺う機会を得たところである。

もうお一人、岡本行夫さんのお名前を記すのは今も辛い。卒業後、板垣先生を囲むゼミの会（一垣会）でお目にかかる程度であったが、外務省を退官されて岡本アソシエイツを創立後、私が勤めた東京ガスのアドバイザーをお願いしてから一気に接点が増えた。公私様々な形でお付き合いを重ね、最近では、2019 年経団連夏の軽井沢フォーラムにメインゲストとして私から参加をお願いするなど、関係は増々密になっていた。

2020 年 4 月 24 日、その岡本さんが新型コロナに斃れるとの悲報が舞い込んだ。まさに衝撃に打ちのめされた。変転極まりない国際情勢の中で、日本がどう生き延びていけばよいのか、その道を指し示すのに、岡本さん以上の人を見出すことはできない。まさに痛恨の極みである。

4. 後期の授業・大学紛争・卒業論文

後期専門課程には、錚々たる先生方が講座を持っておられた。今も印象に残るいくつかの講座名を記しておこう。

経済学部では、荒憲治郎教授の経済原論第一が筆頭科目。これは難しかった。授業中必死にメモをしてノートの清書までしたのはこの科目だけだったかも知れない。板垣先生の義弟である小島清教授は、経済政策の講座担当。後に学長を務めた財政学の石弘光先生は、当時気鋭の専任講師であった。

商学部で管理工学・統計学を講じていたのは助教授時代の宮川公男先生。法学部では国際関係論の細谷千博教授や憲法総論の杉原泰雄助教授の講義を受けた。

学部の枠外であったかも知れないが、加藤二郎助教授のドイツ文化という講座に 2 年間参加した。少人数でゴットフリート・ケラーの「緑のハインリヒ」をゆっくりと原書講読しながら、ドイツ文化についてのよもやま話に興じるという、第二のゼミのような講座であっ



た。結果としてドイツ語には 4 年間取り組んだのであるが、その後全く接する機会がなく、全て忘れてしまったのは残念な限りだ。

3 年生の秋 (1968 年) に、一橋大、大阪市大、神戸大のいわゆる 3 商大ゼミの準備委員になった。分野別に一橋の各ゼミと両大学のゼミの交流を図ろうというもので、歴史は長い。どういう形でその年度の合同ゼミを開くかの打ち合わせに大阪を訪れたりした。当方の準備委員長は、後に母校の教授、商学部長、副学長を務めた同期の清水啓典氏。真面目に準備を重ねたが、1969 年春以降の大学紛争のあおりで合同ゼミは開催できないままに終わった。

ただ、この時の縁のお陰で、清水氏とは 1987 年に、氏が客員研究員を務めていたシカゴ大学で再会することができた。また、後に触れるが、東京ガスへの就職を決めるにあたって、この 3 商大委員活動に関わることになる。

もう一つ、思い出深い出来事があった。1968 年 6 月の小平祭に作家の三島由紀夫が招かれ、「国家革新の原理」というテーマで講演を行い学生との討論に臨んだ。その場で三島は、「政治の本質は人間と人間の全体的ぶつかり合いであり血のにじむ決闘である。その意味においては暗殺も否定されるものではない」という趣旨の発言をした。それは、全人格をかけた言葉の応酬など見られない生ぬるい民主主義に対する強烈な批判であった。しかし、私には、政治の手段として暗殺を肯定するという論は許容し難いものであった。思わず立ち上がって、「不満足なものであっても民主主義を肯定する限り、暴力的に人の命を奪うことが許されるはずがない」との意見を述べた。三島からは、「君たちは政治の本質を見ずに、すぐに人の命は大切だと情緒的に叫ぶだけ」と軽くあしらわれたが。

翌 1969 年に三島の論文集「文化防衛論」が新潮社から出版され評判を呼んだ。書店でこれを見ていたら、一橋大学での討論の様子が収録されている。よくよく見るとその中で発言している「学生 I」はどうやら私ではないか。稚拙な議論を三島にやりこめられている様子がそのままで、赤面してしまった。

三島はこの討論会の 2 年半後、1970 年 11 月 25 日、陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地で割腹自殺を遂げる。45 歳であった。

<大学紛争>

私が後期課程に在籍した 1968 年から 1969 年は、日本の数多くの大学で紛争が生じた時期であった。東京大学では、1968 年初に生じた医学部でのインターン制度を巡る紛争が、6 月の安田講堂への機動隊導入を機に全学へ拡大、大学自治を巡る一大紛争と化した。東大全共闘は日ごとに先鋭化し、「大学解体」闘争を展開、安田講堂の占拠・封鎖を続けた。これに対し、大学側は 1969 年 1 月 18 日に機動隊の出動を要請、2 日間にわたる攻防の末、封鎖は実力解除された。この影響で同年の東大入試は中止された。



多くの大学で紛争が生じる中で、こうした紛争への政府の介入を可能にする「大学管理法」が国会に上程された。一橋大学でも 1968 年末には、学長選挙への学生の関わり方に関して大学側と自治会の間でいわゆる大衆団交が行われていた。1969 年初の本法案上程が多くの学生に刺激を与え、「立法粉碎」というスローガンの下、学内の緊張が一気に高まることになった。

そうした中、全共闘系学生がリードする全学闘争委員会が先頭に立って強硬路線を走り、1969 年 5 月には、大学本館の封鎖と全学ストライキに突入した。以降、一切の授業、ゼミは行われないことになった。この間、全学レベルでの大学側との話し合い（時には大衆団交）やゼミ単位での討論などが頻繁に行われた。しかし争点が十分に煮詰まらない中で時間だけが過ぎ、8 月に大学管理法が成立すると、運動は徐々に勢いを失っていった。そして、若干のいざこざはあったものの、警察力の導入といったこともなく、10 月には封鎖が解除され、授業も旧に復することとなったのである。

私はといえばこの間、封鎖やストライキには積極的に関わらず、遠くから眺めているだけだった。全共闘系学生の過激な体制変革論には与することが出来なかった。しかし、戦後 4 半世紀を迎えようとしていた当時において、大学はいかにあるべきか、学問の目的とはそもそも何か、政治と学問はどう関わるべきか、といった厄介な課題を突き付けられているという自覚はあった。ゼミの内外で色々な立場の友人知人と議論し、時には激しい主張の応酬になることもあった。このままでいいのかというモヤモヤ感は募るばかりだが、納得出来る答えが見つかるわけでもない。結局は何の行動も起こすことなく、卒業・就職に向けての道を歩いていた。

<卒業論文>

紛争のあおりで 4 年生になってからは殆ど授業がないままに時が過ぎた。ゼミも講義も、秋以降の数か月で形が整えられていったという印象が強い。思い返せば残念なことであった。

それにしても、卒業論文は必須である。先に触れたマニング・ナッシュとルシアン・パイの原書 2 冊はメモを取りながら読み進めていた。それに関するアジア経済論、アジア宗教論、東南アジア史などの書物もぼつぼつと読み整理していた。

東南アジアなかならずビルマの近代化のありようを、村落レベルの政治・経済・社会構造に焦点を当てながら解きほぐしていく、という姿勢で勉強をしてきたのであるから、卒論のテーマも必然的にそれに沿ったものになる。短期間でも現地調査が出来れば自分なりの所説を出すことも考えられるが、当時では叶わぬ夢である。結局は「出来るだけ質の高い book review を目指しなさい」という板垣先生の指示に従って、ナッシュとパイの 2 著をベースに論文をまとめることにした。題して、「ビルマの近代化と村落社会の構造」。

国政レベルで打ち出される様々な近代化政策、経済発展政策が村落レベルではどのよう



に受け止められているか。しっかり根付いている小乗仏教の教えがどういう影響を与えているか。こうしたことを整理していくと、ビルマの近代化や経済発展は容易なことではない、という悲観的な結論にならざるを得なかった。

ただ自分なりの問題意識として、そもそも「近代化」とは何かという視点が重要であるとは考えていた。近代西欧で発展した議会制民主主義、資本主義の下での経済成長を無条件に是として、その実現こそ近代化だとするのは、一つの価値観に過ぎないのではないか。まして植民地として西欧重商主義、資本主義の収奪を受けた諸国にとってである。ビルマを含め、これら諸国が自らの将来に向けて、自らに相応しい価値観を確立していくことが最重要の課題であるとして、稿を閉じた。

4 年生の秋から書き進めていたものを、年が明けて板垣先生に見てもらった。良いも悪いも特段のコメントはなかったように記憶する。当時だから原稿用紙に万年筆で清書したものを、慣例に従い製本し金文字でタイトルを入れると、一見立派なものに仕上がった。これは大学の図書館に収納されると聞いたが、その後二度と誰の目にも触れることなく、今もどこかに眠っているのだろうか。

後日談であるが、東京ガスの会長を務めていた 2015 年春、東南アジアビジネスの司令塔となるべき子会社 TG アジア社をシンガポールに設立した。その開所式に出席するため現地に出張した際、時間をやりくりしてミャンマー（元のビルマ）にも足を運んだ。ヤンゴン（元のラングーン）滞在は 2 日だけであったが、市内の再開発地区、有名なシュエダゴン・パゴダ等を視察し、さらには港湾開発・工業団地計画を見るため郊外にも車を走らせた。初めてこの目でミャンマーを見、その空気を吸うことは誠に感慨無量であり、長く未完で終わっていた自らの卒業論文に最後の 1 行を書き加えることが出来たような思いに浸った次第である。

5. 卒業、就職、そして幾星霜を経て

就職先を決めたのは 1969 年春、4 年生の初めの頃であった。当時の日本は未だ高度成長期にあって、一橋大生にとって就職にはさほど苦勞を要しない時期であった。

私自身は、商社、銀行などでバリバリと仕事をしようという意欲は湧かず、さりとてどんなメーカーに行きたいという当てもなかった。父親にならって新聞記者にという考えもなくはなかったが、自分が夢と理想を追いかけただけではないかという懸念が払拭出来ず、踏み切れなかった。

ちょうどその頃、3 商大ゼミ準備委員として、合同ゼミ実施のための協賛金を企業から頂くべく巡回する仕事に携わることになった。やみくもに会社訪問するわけにはいかないから、まずは知り合いの先輩を頼ることになる。その最中、4 月だったと記憶するが、板垣ゼミの先輩を頼って東京ガスを訪れた。面会に応じて頂いたのは石井徹さん（1955 年）。協



賛金の話もそこそこに「君、就職は決まってるのか。人事課長も大学OBだからちょっと会って行きなさい」と、いきなり面接のような形になってしまった。時の人事課長であった堤光義さん（1953年）が本当に素晴らしい方で、理屈抜きに「こんな人格者が人事課長をしているのだから、きっといい会社に違いない」と確信した。後はトントン拍子で、5月には実質的に内定通知をもらった。

当時の東京ガスという会社の印象は、地味ではあるが公益事業として社会的に意義のある仕事をしており、安定的でもある。電力会社がやや官僚的に見えるのに対し、そういう匂いは薄い。折角ご縁があったのだからこちらにお世話になろうか、というそんな感じで最終的に就職先を決めた。まさにゼミの縁が就職に決定的な役割を果たしたのである。

<卒業・就職>

1970年3月31日卒業式。学内紛争のあおりで正規の学長は不在、馬場啓之助教授が学長事務取扱で、式は簡素なものであった。その日の夜、如水会館で如水会主催の卒業祝賀会があった。当時の如水会理事長は本田弘敏東京ガス会長（1921年本科）。どんな挨拶があったか全く覚えていない。そして、翌4月1日は東京ガス入社式。ここでまた、本田会長の挨拶を聞くことになる。これも中身は覚えていない。

それから幾十年を経て、自分自身がその「中身を覚えてもらえない」挨拶をする立場になろうとは、もちろん想像できるはずもない。

東京ガスに就職した時から、板垣ゼミでの勉強とは縁が切れたものと覚悟していた。ところがありがたいことに縁は続く。

入社7年目1977年に、設立間もない財団法人中東経済研究所に出向することになった。よく見ると、研究所理事に板垣先生のお名前があるではないか。早速ご挨拶に伺った。この研究所で3年間、東南アジアと中東諸国の政治・経済・エネルギー問題の研究に携わったのであるが、ゼミでの勉強のお陰で活動が厚みのあるものになったのは間違いなし。

研究所から会社に戻って配属されたのが、原料部であった。この部署は諸外国から都市

卒業式 板垣先生と



ガス原料としての液化天然ガス（LNG）を調達・輸入することを職務とする。典型的国内産業であった東京ガスで当時唯一の海外関連事業部門だった。しかも主要な取引先は、インドネシア、ブルネイ、マレーシア等の東南アジア諸国である。ゼミの縁を感じないわけにはいかない。もとより、大学で学んだことがそのままビジネスで生かせるわけではない。しかし、各国の歴史を知り、経済発展の足取りに思いを致していたことが、マイナスになるはずがない。東南アジア諸国や中東諸国には何度も出張し、LNG 基地のある辺境の地まで足を運んだ。その都度、周辺の村落のたたずまい、人々の生活や自然のありように心躍らされたものである。

結局、ベトナム、タイやフィリピンも含め東南アジア諸国との縁は、東京ガス在職中を通じて継続することになった。

<一垣会>

先にも触れたように、板垣ゼミは 1942 年以降、29 年に亘り 500 名近くのゼミテンを送り出し、1972 年に幕を閉じた。

「一垣会（いちえんかい）」と名付けられたゼミナールの会が正式にいつ発足したか定かでないが、会報「一垣会誌」第 1 号は 1952 年に発行されている。この会はその後長きに亘って、板垣先生を囲んで旧恩を謝し、ゼミテン同士で久闊を叙する格好の機会として継続されてきた。

私自身も、1968 年の先生の還暦のお祝い総会以降、節目毎に先生のお顔を拝し、諸先輩の知遇を得、親しい仲間と再会を喜び合う場として、毎度楽しみに出席してきた。

1998 年 10 月 15 日、先生の卒寿をお祝いする総会が開かれた。先生のご意向により、これをもって一垣会総会は打ち上げとなった。この時、一垣会誌第 9 号（卒寿記念特集号）が先生ご自身と 85 名の寄稿をもって発行された。

先生が永眠されたのはその 5 年後、2003 年 8 月 28 日のことであった。

その後も一垣会の名の下、ゼミテンは年次毎にあるいは様々なグループ毎に交流を続けている。正にゼミの縁のありがたさである。

<幾星霜を経て>

卒業から 45 年を経た 2015 年 6 月、私は第 42 代如水会理事長に就任した。当時の松本正義理事長(1967 年・法)から後継打診を受けた時、最初は、とてもその任にあらずと固辞させて頂いた。しかし、松本さんが大阪で住友電工の現職社長を続けながら、如水会のために大変な尽力をされているのを目の当たりにするにつけ、母校への恩返しという意味でもお引き受けするべきかと思い直し、力不足は承知ながらとお受けした次第である。ほぼ同時に一橋大学の学外理事の職にも就くことになった。

大学の理事会に出るために、卒業以来まさに幾星霜を経て国立のキャンパスを訪れた際



には、しみじみ人生の巡り合わせに思いを馳せた次第である。

如水会の定款は、会の目的の筆頭に、「一橋大学の目標と使命の達成に協力」することを掲げている。母校愛に溢れる多くの会員と共に、大学支援に繋がる様々な活動を展開するのは意義深くやりがいのあることであった。在任中を通じて、各地で活躍中の一垣会会員からも多大な力添えを頂いた。

当時、文部科学省の姿勢も含め、我が国における人文社会科学の位置付けは必ずしも高いとは言えなかった。そうした中で、「世界のトップ大学と競いイノベーションの牽引役となる国立大学」いわゆる「指定国立大学」に一橋大学が選ばれるかという点に強い関心が集まっていた。大学側はもちろん、指定獲得に向けて全力を挙げていた。私も如水会理事長として、また大学理事として、出来ることは何でもしようという気持ちであった。

同じ時期に、日本経団連は大学改革を我が国にとっての重要課題の一つと位置付け、産業界と大学の対話の場として「産学協議会」を設置した。この会議に、一橋大学の蓼沼宏一学長（当時）は国立大学代表の一人として、私は経団連の教育・大学改革推進委員長として、それぞれ参画することになった。様々な議論の中で、ともすれば理工系・科学技術系重視に偏りがちな我が国大学教育の問題点を指摘し、人文社会科学の重要性を訴えることに注力した。また、リベラルアーツに関し蓼沼学長が中心になって、「現代におけるリベラルアーツ教育とは、人文学、社会科学、自然科学にわたる学問分野を学ぶことを通じて論理的思考力と規範的判断力を磨き、課題発見・解決や社会システム構想・設計などのための基礎力を身に付けること」と定義付けたことは意義深いことであった。

この間大学は、「指定」獲得に向けて精力的な活動を展開していた。その一つ、内外各層の識者の参加を仰いで大学が設置した「社会科学の発展を考える円卓会議」でも広い視野から活発な議論が行われた。そして、新しい時代に対応する新学部の創設も含めた大学の戦略的な構想が認められ、2019年9月に一橋大学は指定国立大学法人の指定を受けるに至った。

如水会活動の中でも、各地の支部を訪れ、活躍中の会員と交流することは楽しい仕事であった。海外ではシンガポール支部やジャカルタ支部を訪問した。如水会主催の一橋大学移動講座で全国各地を訪れたことも思い出深い。

大学の行事にもたびたび出席し挨拶をさせてもらった。その中でも特に印象に残るのは、2016年3月に大学卒業式で祝辞を述べたことだ。自分自身が入学式・卒業式を体験した兼松講堂で、壇上から卒業生にお祝いの言葉を送るというのは、面映ゆくも感慨深いものであった。出来れば卒業生の皆さんの心に少しでも残るようと、準備には力を入れた。

祝辞において、前半で自分自身の学生時代の体験が様々な形で社会での活動に関ってきたことを紹介し、後半では山岡鉄舟を取り上げて信念を持って大義に尽くすことの意義を述べた。そして、終わりに、あらためて卒業生への期待を述べたのであるが、それはそのま



ま一橋大学への期待でもあった。ここにその一部を再掲し、本稿の結語に代えたい。

『今の日本においては、政治、経済、社会の各層各分野において、間違いなく「真の意味のエリート」が求められています。そうした人々の、身を粉にするような努力なくして、今我々が直面している難局を乗り越えることは出来ないと考えます。

皆さんは、日本で最高峰の社会科学の殿堂である一橋大学で学ばれました。その過程で、幅広い教養を身につけ、深い専門教育を通じて自らを鍛えられました。そして本日、卒業の時を迎えられます。皆さんはそれだけでも「選ばれし者」即ちエリートたるべき資格、あるいは責任を有しているのです。

そうした皆さんには、この社会のどの分野にあっても、高貴な人の矜持、noblesse oblige を失わない、真の指導者となることを目指して頂きたいと思います。そして、この日本を、さらには世界を、少しでも良い方向に動かしていくことに貢献して頂きたいのです。それこそが、一橋大学を卒業される皆さんに社会が期待することであり、皆さんが果たすべき責務であると、私は確信しています。』

